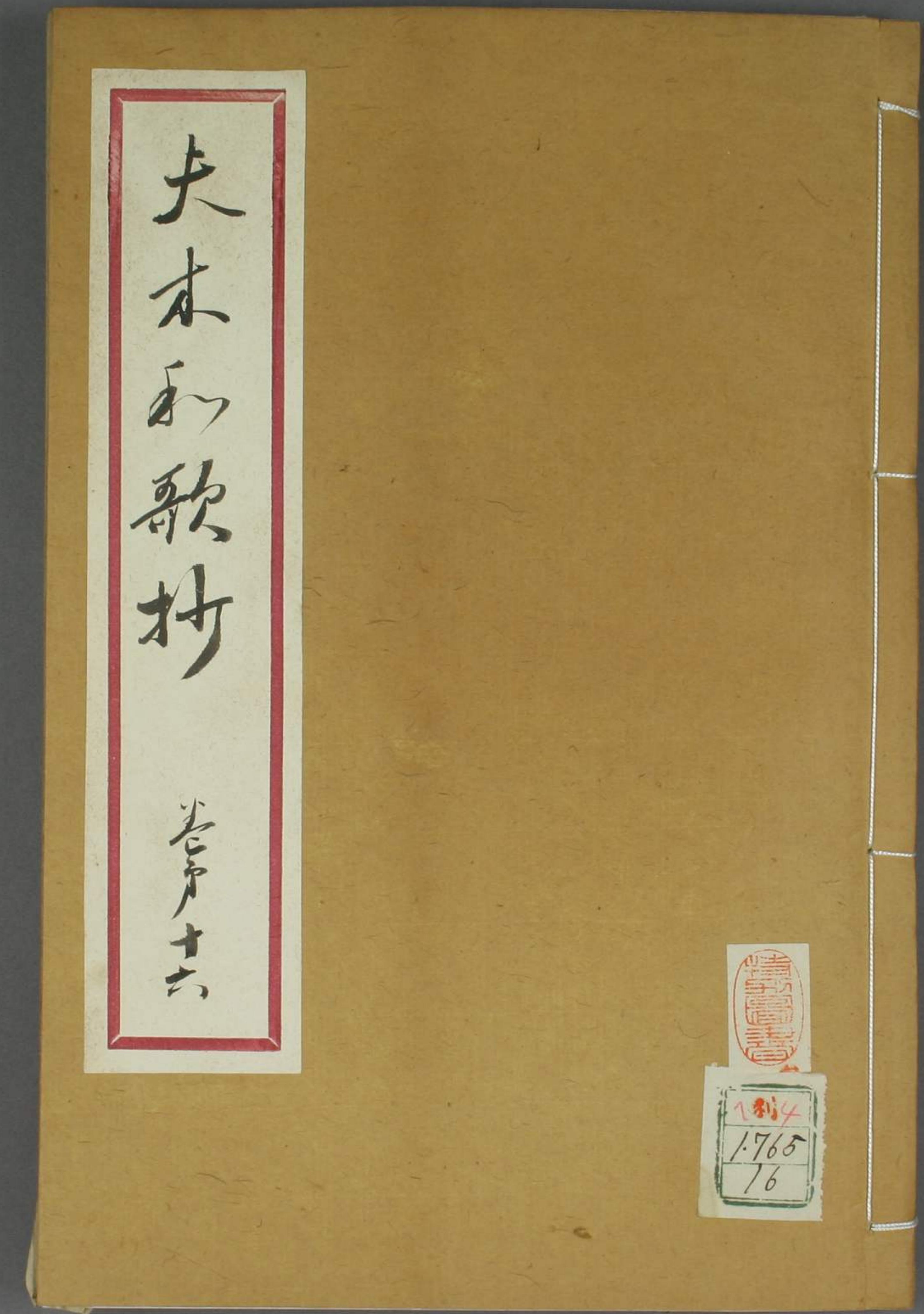


Kodak  
LICENSED PRODUCT

C Y M

KODAK Grav Scale

© The Tiffen Company, 2000



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 20 30 40 50 60 70 80 90 100 JAPAN

133

1765  
卷  
16

支本和寄 手書き文書十六

冬窮<sup>4</sup>

(改直)

初冬<sup>5</sup>  
初夏  
初秋  
初春  
秋雨  
冬霜  
冬草  
冬雨  
冬雪  
食  
綱代



伊豆國  
坂村  
賀  
熊

後家被施政

初冬<sup>4</sup>  
三行入丸

正治二年百首

あけ  
ゆくのれのよむひまつりのうそめのくわのよりへ  
千五百萬両合

日

肉のよきとくすきの枝のよしとるくわくわく  
かく

前中初見空處

松葉<sup>くれ</sup>もみじのよがゆくわくわくのくわ  
かく

あ陽門院跡

冬至<sup>はが</sup>のわざりきのほ、みもうをかか  
かく

回音金

後家被施政

710

709

わくとてやうひぬうて  
「て」のあち

百首四章

水經注

鐘音門虎

西夏文書

四  
黑

蒙古文

源師充

卷之二

おれの本の事あらう  
うりやうそをやうへ  
まこと

かくのまへうづひ  
かわをたまよめらる  
まくは

カハラシ

かのよひのひよみのと  
お

孫少川書

夕雲の月夜

白居易集

はち  
まくらのまへにあそぶりてかみのまへ  
まくらのまへにあそぶりてかみのまへ  
まくらのまへにあそぶりてかみのまへ

國朝詞林記

同

西あれの野原をへて  
素戔れて山をまよふ  
文治二年正月  
前中御事へ室あら  
まことあるのゆきやとひよもあてうみのむけ

西脇二年  
毎月より  
御内事  
御内事  
御内事

まことに此の事は御心の事なりと申す  
文承立と申す者にてやがて民子へゆか  
神

うるわしくてあらゆるのをもつてある日はおのづから  
あまき色あさほひともあわせ  
朝(あさ)ぬとひまほ  
打(うち)たまへ

白山記

卷之三

卷之六

১৮

蒙古文  
水  
火  
月  
日

子の西あ寺合

日

セ  
むらかし  
ねひのうこの山よ雲のまのうをまわ  
遠去八年百寺合かけまつりたと中わ奥氏  
引

千ちうへ四方のやうの祐育ゆきよつよひのゆきよ

海川院四百首初はじ守初云圓後

祐育ゆきよまのせよせまのどうりあるままである

隆原法師

阿彌アミ三行分さんぎょうぶん

連係雪年内裏すくい十そよがい山油院さんゆいんの繫

祐生月ゆうじゆ開あらしはまま阿彌アミよりうそくわくわくう

是年內裏すくいセキせき合あキク様よう日

もみぢりよ

あれうつよくくわくのくわくくわくをだうだう内うちのすよみすよみ

聖セイおとこ寺てら合あ山源さんげん山

大龕だいと有あり

「そよごそやくより神かみくらまやひとり向むけるの白雲  
おりもよき経きく白雲のすくらんすくらんひよまひよま」峰

朱蓋院しゆあいんの繫

セモ  
新千社上かみ御ごあらかずまま  
皇后こうご穩むぎ子

1713



大神主百首寺

ほしの院山

きの東乃月の正月にまよ附あらうありけり  
ありあけ

山室社百首寺

月

そら

かくの山のあはれゆきしやう月としゆみ

もも山百首寺

良

もも山百首寺

忠良節

新後拾

月

あらし

月

民マハムサ

日

日

かくの山のあはれゆきしやう月としゆみ

日

月

日

月

日

月

日

月

日

月

日

月

日

月

日

月

日

月

日

715

四

な  
事  
師

九章集

めうちかねくみゆきよすくまのまへよハタのわれや  
よ  
色

かゆくまの  
歌合  
むら  
才二の  
み

卷之三

江ノ島の前田の山のそと  
の山のそと

老  
父  
五  
千  
卷  
文  
庫  
藏  
書  
記  
卷  
之  
六  
中  
古  
文  
學  
部  
新  
增  
書  
記  
卷  
之  
七

勝門院の時百三  
一  
濡  
勝門院の時百三  
頭

卷之三

万  
雨  
槇  
は  
内

新古  
元氣を盡す日向の歌  
宣和内閣

卷中初之序

蒙古の事  
トトモニテ

財をもてハタクれども乃の形勢ニシテモ  
ニテモ  
け

參後  
（下）

はくすくの神をかたどり

はつ

卷之三

植木の間で見る  
木の間で見る

あひるの年位貞社主食ひよ猿穴町あと

あつちか  
氣はるか  
かわ  
増

也無事也

家業用事切

達摩之年五是四月

仁義禮智信  
次  
殘

四

タカハシ  
加賀  
タカハシ  
加賀

かくすの事あらまこと

卷之三

城西院  
白首

やかに云は  
止腐

血氣之興  
十  
亂

西漢書

13

中  
多  
年  
舊  
物  
之  
集  
卷  
之  
三  
五

卷之三

卷之三

まつわせには  
木の葉にまつわせ  
まつわせには

中興而復之于公

四

文  
嘉  
年  
魯  
之  
中  
人  
也  
其  
書  
法  
得  
之  
于  
王  
羲  
之  
而  
更  
出  
其  
上  
世  
人  
多  
以  
爲  
神  
品  
今  
存  
世  
者  
不  
少  
其  
行  
草  
书  
尤  
为  
绝  
妙

ニヤニ  
ナ

思慮入人指掌家無百事安以何為

人内多とくに能の力

卷之四

傳奇法師

万代  
一町もとまくよろしとがみ  
は  
宣  
は  
な

卦統古雅上

卷之三

5- まことに此の事は  
おもむくに思ひて居た  
が、内々の心の如きは  
おもむくに思ひて居た

行分下

本業の内より  
あと

以安元年而舊居為家民又曰中家  
まち  
ふゆ  
三  
う

萬國爲家民久之由來  
上  
卿

每首三首也

8

ちくまきはあじとがり  
そののをとくらう  
はら  
まのまくらへてあるまくら  
あら  
えや二年も嘗てゆ  
日  
くらへしゆくらへておおぢや  
やま  
あえ三年百三歳を、春秋のね  
朽  
埋  
やま  
吹  
ニ

周易

16

ちうくはまの風の匂  
あま香ると  
かな  
西より人  
あり

卷之三

西乃人

音卓とくや  
吹き  
あらし  
とがらかとくや  
同  
紅葉  
家集

えぬかくもへや  
あらし

卷之三

王雜三  
六帖六  
臣ある

老の事 牛も馬も  
大變な事  
おのづちも身のまゝも口の  
口

蒙古和東京  
印  
和歌山  
印

赤東

後漢書

新拾冬  
之年

力  
力

此書卷之二  
大初之經傳

安之年十月右至良鄉之今歲也  
在京甚仰仰

有余慶物外人

清

清

蒙古國の白旗を乞ひまし東の國也

底のじゆふあらうとよつ  
はなはなはなはなはなはな

江戸の年貢  
は九束に當り  
かは  
や

家成之象亦合為素  
形如危鳥

西曆二年正月  
新嘉坡  
丁巳年  
正月  
新嘉坡

千五百萬斤合  
弟大幼之志而  
以

卷之三

承久四年夏六月  
吉日良辰  
入居忠房

卷之三

仁宗二年元月  
司馬文正公集  
蘇

苑

有余冷風初

あらうよ  
かねうどんのゆき  
あらうよ

四

がうかく  
のと  
そ

嘉慶乙卯歲次正月廿二日  
寂

烏鵲

よ  
の川を  
まく風が  
吹く  
林立の  
木の葉

孫延之年少時家貧食甚

布衣雜記

本居宣長  
山家集  
山家集  
やまと

三

久安百歲  
一橋  
萬象更新新舊人

卷之三

西漢子年正月  
小猪年

家集卷之四

傳  
散

一  
也欲無事而無事總如此  
源仲

まよひのいとおのひくともうのうじの本は

家の抱ゑ

日

かともうほりきあやかし木の爲まふうの筆  
松浦マあき合あきとすまと爾と仰伸白  
林そし事の間よきうれし語よりあらまのえ

歌集序の有集

松浦と云ふ

望むちうね浦のひはよりのみのひきとぞ

室跡

うすうきのほのかとももとよとよみこし

トニキ 読

トニキ 独子百首の都門 路跡今後同書と

獨子本歌とのつづきとく

ナ歌百首

日

ちゆをあそひよむよむよおのうりよまくくぬねのひそ  
遠々と奉たまむかすとくまむよせ一首

日

おひきぬまよみうれぬまよがくうあくとせうとの

はき桜院の筆

日

深山の音ゆきれりやくゆくの音こゆくのそひゆ

遠々八年百首守合役九首

あれももとめどりのうそとくゆる用ひしは

723

おまえを食え樹立松は豈意後改

留にじきやからよくうりんあひそじりのむかし

とすままで合爲事 宿連

山あら松のそぞりのそりの山あらのそりの山あら

豆宿三年百月

日

前後三の木の木ひづる御みとくられまつ

四葉をす中

後京極後改

あむとうく白きの高とさかて庭のあめにや月も

天王寺西

五色わら

タのうちとすくわらとひをもくとしきよの

とすままで合爲事

前中幼くまぬ

豆豆じもとくまのよげふとまもとのゆく

おひまちるやのまどりの神ふのまどり

江二住處院

を

ゆくゆくのむかひまよ深くじくのつもぢりそぞ

遠條八年の裏十流合西園寺入内と改官

前のももむかひのひそりあるりりに月を

千五百萬で合

無能わら

ほしのものむかひのひそりと流れてかとくとくする様

續拾遺今

中文指掌人家房

のね

故會山聖道義

前半幼少之時

凡そ聖のことをどうつじきと申す

ち候歌多見

先後御名

今すこしうふうにちと吹いてみをもうちすり木うの風

西家空也一曰そ

後二位御名

かみな  
ありあけ  
おとせ

まこととくらむはるかよ

一西

辛子正月

まことに方の角のちへ事居てさうつりのあれでゆう

遠共八年一百をす合

ほりえ門を

かみのわせうらうに光霞よ

かみのわせうらうに光霞よ

後室御名

もくろもくのめくやくと極くうさんとさやひ

おとせ内大臣

因爲てゐるうりの事やあらがん本多うよみとく筋

安え三年十月吉日あす金成

清浦翁

御のよむりくく村内ふくうすやあら

はす判官清浦翁ち右すもく事うれ

もやまうれすとちとうもくう

にめれうとひともうとあどもく人

國

上

セ

御のよむりくく村内ふくうすやあら

はす判官清浦翁ち右すもく事うれ

もやまうれすとちとうもくう

にめれうとひともうとあどもく人

725

あらへりやうやう登通大式の文會  
立風法原の事ハシと門よきとくとよき  
ゆきりとよきとよきとよき

源仲

ちりせきとよきとよきとよきとよきとよき

右原立風

せうじよとよきとよきとよきとよきとよき  
遠保四百首

近二位霞陰

高山源の本ひらりつてやうすくもはとそ  
遠保立風ハシと合せ川风

五三佐志

みづあさたつたつ

あきのまきかよひまつ川は深のとく義の本ひ

百首

多羅也

あのくやしの山風ハチとよきとよきとよきとよき

遠保四百首

前中納立風

いしみたの浦をとくよみのあらのまくひ

き月のねやの見りと見よれの折まとももす

百首

感る由あ卿

わらふのむよひに風の高きよきよきよき

お旗立風ハシとよきとよきとよき

右原立風

新若水

三  
本  
著  
者  
之  
文  
集  
卷  
之  
一  
新  
刻  
本  
附  
錄  
卷  
之  
二  
新  
刻  
本  
附  
錄

几章

二三

卷之三

卷之二

阿蘇の事の多きは  
東の事ばかりも  
あつたる事

苏东坡文

己亥年夏月  
王之春書

拾芥錄

元  
乃  
合  
は  
政  
力

卷之三

海  
南  
王  
子  
雲  
集

山よらす事の多  
き山のちひのあわく  
きよりはまつりけん  
同

遠縁八年百首文集  
かほ  
ひ

九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌  
九章歌

あひる山の音

希氏之書

蒙古文書

百々  
また  
か

卷之三

13  
14  
15  
16

孫子兵法

卷之三

西  
かみなつ  
はせ  
そめ  
付さうりぬるふひあれと祚  
西  
延喜十二年十一月内裏義合

六六  
はな  
ちり

卷之三

新拾久  
おらん

日はつ

卷之三

うては

永平八年四月中納玄泰恩

孫  
策

立

かよ  
かよ

えふえ年十日門太良あす合は萬

折中御三師後

菊

通ひとよあやのすれりてや

源雅光

あうとよとよすへ白鳥のうらみゆせんが

重基

林<sup>くし</sup>まとみほのをとのうとひりうつみゆせんが

百首ワナ

水仙院

をもともとをのわや左のあくとそしゆめを

立向むす合めあ

は京極折政

三曲のむとひあよみとけ

中あくとひあよみとけ

正三住經あ

凡雅冬

染<sup>きく</sup>まくまくのあくとひあよみとけ

正三住經あ

とう

法橋殿

あい

あすかあしきのうみてまくとおはなをみの白鳥

おはせ

129

はな

花とくあひのすかとて乃のあらひと神よみがえ

階徳御ト

あうよみ

また

そて

ひ

は

は

は

は

年忌は節

枝とむづ

を

ひ

は

は

は

は

のうりのくさり判云右市とくのすく  
りよひぐへあまのふりひすとくのす  
のうりのうりとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

しら

四事よ西肩名花

喜蔵和尚

三才

白事のあとひのるざれとちのむらとくとく

水肩詔

三才

しら

は

前半初云宣教

しら

おとくのうとくはまのあよもとくとくとく

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

恋葉

日

しのむれどもよしもとまつてみゆひくの葉の  
は 菊

文集序 十月 三行句

日

てよゆびはまくへおしてからひそひのうきの  
よ

秋月 三行句

日

文永六年毎日一首中 民人あめ

秋月ひづのくまうるてのりとす ようき  
ううき

文集一百首十月のうえぬ下 情多景仙

喜花

前中納言

日

伊豆波里四十七三 歌イ

秋月ひづのくまのまゆかうそくのひづの秋月

秋月社一月三日

日

秋月ひづのくまのまゆかうそくのひづの秋月

西原二年百首

日

秋月ひづのくまのまゆかうそくのひづの秋月

秋月社一月三日

日

秋月ひづのくまのまゆかうそくのひづの秋月

秋月社一月三日

日

秋月ひづのくまのまゆかうそくのひづの秋月

731

十月を

正義

萬葉の秋のり此へますてまゆるく一月を終し

之が年毎日をすむれ、國をもめ御

今日

御まつり日とあととやうのものもくのまづく

六和院

修業船長

ちもあらのあはれ、乱れてちあわせ御舟にそむけ

多持衣

行方

天仁二年師者遠在東夷國

祚有り月のじのじんがれど、改めてさう

明治百首をすく圍み、夏疊る或流疏帰宿

民の心が

まじとて福わしむるのあらわす、お輕くおゆき

あえ四年整忽百經ある事無く

かく人ひくもむしむのうよはるを

三官

三行令上

鷹川院附百首をすく一かずうち合

霧

在原基俊

りもてりもてぬる川のうるお葉のうる  
遠保四年内裏すまを合ほほほほほほほほ  
あまりもまの川をもむかすよもむかすよ

D732

西あ二年毎日三中かうしやま民みんなる内うち  
馬ばのととくの川かわのやまとりのりの内うち  
~~あき~~けけとおよこたはのうだお出でだせのう

文永八年正月百首 内

あきはきはなはのよあへ

渡

康元八年毎日三中 内

若のさくらあさとすくわせ

後

先御院入をニ正就まこと五十三萬

後繁は席

裸の貌うなづき内うち遠す合名すかかえ店

川かわのさくらあさとすくわせ

4 指掌

三行分上

人ひと

さくらあさとすくわせ

六百萬

注二便鑑

席しもかれのとすくわせ

いろのものいろをすくわせ

大善有事

一

ほ  
か  
声

卷之三

しも  
教りよ  
事あとも  
うらよ  
席をとり  
め

かわてもなべら  
おもがよからぬ  
うら

文治之年  
白首

卷之三

角魚へ年で等百首 民アハ内事  
龜のあれもひたかくりてひととよ  
かな

な  
る  
そ  
の  
か

先  
主  
之  
子  
有  
大  
過  
失  
而  
不  
能  
改  
悔  
人  
謂  
之  
無  
能

遠孫四年丙午奉乞之往行修  
加汗

京本

六  
契  
多  
不  
守  
之  
也

後漢書



卷之三

卷之三

をつまみのひも  
をあわせたる  
おもて

あまくさや  
かのじゆく  
なみ

西蜀王建

さゆりの庭へ  
春のまことに  
也喜  
よか  
かな

まわらひのくわ  
いわおは

久後六年九月一日  
白雲寺主大僧正經  
お  
れの心の如きもあらぬ  
もあらぬ

西久三年正月四日  
中納言

遠久之年一回音

新六一  
ひかく  
せ

白眉子中  
（おもかげ）  
前津初之家

東新江の水をひきよへて  
あらわす

まほらのむかしのうきよを  
ほを

達長八年百三十六合前六納モ歌物  
あまうそくめりやとおまけのをひのあく

四集仲

守

水西院ノ製

それが歌わゆまよりはまのをもひらまくと  
まくと

達保三年冬百三百そ四句 円

よしとねのまくつゆまよりまくとあまくと  
あまくと  
承久二年四月一日松原中納ミ宮跡  
濟くわくわくわくわくわくわくわくわく  
はまひえり

法安え年一百首

ほ九集内合

注ア屋敷

羊とて馬のむとてゆきあひもとと

達保五年内裏守合を山裏

佐宣鶴居

新拾今

すみのとじうひうひうひうひうひうひうひう  
日四年内裏十二月合山三佐宣鶴居  
をもとハシナヒモトモトモトモトモトモトモト

達保五年正月守合を山裏

枯光鶴居入内撰改

婆歌のとむのとむのとむのとむのとむのと  
枯光鶴居入内撰改

又歌

1237

傳ふ御ト

色々の事あらうと聞ゆての神とおそ  
つかえ年毎三月 恵みる御

上 おのづのあらわしのまのよはまかまのむ  
今

文永六年毎三月中十一月一百日

とおへすあらわしのよもよも月とまくわ  
とおへすあらわしのよもよも月とまくわ

吉祐御書

え後あべ

新六一

おまくさをよこすおうらたきをさりてまくわ

おまくさ

好思

ひよりやせりてうそおうとまくわ

正月二年百日

未申初未申申

(四)

九

おのづのあらわしのまのよはまかまのむ

4

おまくさ

三行分た

三

日暮社十又五事合 ほ東被持取

あらし

井あらのまの藤あらがれておちまよどた筋せきと筋せき

遠仁え年十首ニ合前吹主

宣士吉良主傳承

小藤あらの筋せきと筋せきのめおつさのめおつさのめおつさ

三首六十首中

好思

おまくさ小藤あらの筋せきと筋せきのめおつさのめおつさ

まき

438

みみ百萬ナリ合

大氣有氣

かまくすすを皆のあわうれどもうりとし

裾尾

家集  
家集

中

西引人

かまくすすを皆のうもあわうてあはれつゝ

け

象集家集家集

涼仲山

りまかやまんじてぬこもとをよあうてあひぬ

お久え年

年

とひ

ば

竹

尾

ほき院

院

か

雲集の毛

の毛

の毛

あと

夢ゆのまへゆくのゆのゆのありへはのくもくとすまや

百首ワナ

尾

あ中納ニ多喜石

ゆのまへゆくのゆのゆのありへはのくもくとすまや

百首ナナ

尾

ははも入る萬國石

桔  
續後拾雜上

桔

家集と

家集と精仁

王

はか

桔  
片  
同

背はまくらとくらうづくはりのまくらす

桔  
思のまくらす

思のまくらす

思のまくらす

思のまくらす

思のまくらす

思のまくらす

思のまくらす

家集と精仁

はか

はか

桔  
續後拾雜上

桔

家集と

家集と精仁

はか

はか

はか

桔  
續後拾雜上

桔

現存六

水聲集  
さみやうすみのよみのたれとおゆくとひめのよみ  
建仁ニテ新義寺合前歌をさま

即ち花光

美多川すはれよめく風よかな野のあきを

建保四年内裏十三合八公院も含

猿飛山のれなれおもてやりし物の病と云ひ

聖朝時疫をま  
後耕船長

たゞこのわのよそうやもすりぬきとあれども

復葉集

文治五年正社百首

春を吉多々人傳

しほ  
城

復葉集

春を吉多々人傳

お六

三體歌

お六

三體歌

お六

三體歌

お六

三體歌

千首詩

同

お六

同

二集院彌政

歌集卷中

續後拾冬

後拾冬  
み  
かくはうめのあらわれをきの控年あれよ  
わ

西漢二年夏四月

卷之三

はの國にかみまくらをめぐらす  
あわ

烏鵲集

卷之三

卷之三

ももかのわよみのよむてゆき

清浦  
卓吾

多  
永  
池

池多水處也

達旦八年百歲之多  
住室不移

うすくまきのまへ  
かくあふとく風てあまくはる

先傳御書  
かせ

はるかの判事はおもむろとよひをうけたる  
事

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

嘉慶二年百首之三  
夜望月食

鶴

すなづるかくまうれしやれまつり風かせ

四十  
三行句上

迎鶴之年空文獻人合樹風

おうれのまめやう風とすらわえむくわ

鶴子月移よ歌す合

歌

然やうのあすゑのうねひのうあくとせひや

三百首句中

好

家  
ゆふるよの聞かうのうめくわ

同

音あくめめりくのうめくわ

同

音義子合俳集

大益石有歌

きよみのうのうめくわ

同

辛丑秋辛合遼北局中遠望

さくらくく風よからうの風のうめくわ

同

あらし

前半初之空歌

まくわくまく風よからうの風のうめくわ

同

あらし

後半歌

まくわくまく風よからうの風のうめくわ

同

隆佐角下

月

同

五月半

はるか院の事

つまうりにまわゆくわくわくひづりうきうきの  
せ

五月半

はるか院の事

五月半をみのうへむれきとわくらうてうくと  
達保四年内裏十三月もとがまくの内裏政

ちをくりあわぬあくまの上よつてふせりく

さね銀色

萬年納めあん

まよをれりりりもくもくとおきておきて

御みか

平春阿多尼

まよのまよのうねくとくとくとくとくとくとく

一月三行令

聖事の月と 大和玄經修

ゑあくよううそとわくらうと月の辰

達保五年内裏十三月

拉大納言忠修

門の用のいわゆるうてたすじ縁やう月の

老あふすと合

はるか院の事

うそくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

四月

日

まよのうねくとくとくとくとくとくとくとくとく

月

743

百首御歌

あら門院の聲

新後拾雅

かわら山のうちあまれる川をもとまの月

日

明徳院の聲

鶴

三月のまつたるの月ねあり東へまづよすれ  
れのあきせんまくさむにじとりれの月の  
新元年一百首を月 鹤をもとまの月

日

み首奇

冬のくわすのくわすをあらうる月のうすかは

月をつむぐ月をよれりて月の西の月

正安五年内裏南庭等に萬中納をめ焉石

ましのまわねうつ月そよがねお吉のアラモトま

新元年正月そよととと 雪りと人

きうわのすまつてひくと月のすじとそま

正治二年百首 あま細ミ思ひ

あらのあれうつまつてすまんひととまの月とまの月

宣和門院母

かまのあれうつまつてすまんひととまの月とまの月

1744



ま  
よ  
い  
わ  
櫻  
花  
室

文永五年  
三行分火

日西

以迄之年為日之中

五  
九  
九  
九  
九  
九  
九  
九  
九  
九

文永五年  
九月三日中  
日

中興之君  
宋高宗  
孝宗  
光宗  
理宗  
度宗  
恭帝

卷之二

14

かくもあつたまのとまつちよねのまゆ  
さうをものあり

五  
五  
五

朝ち  
この里へ來る事  
ありあらずもよろしくと  
おへきだ

1

新編卷之二

4  
カタマリ  
カタマリ

三字  
多  
少  
三行今下人

卷之三

葉雅之  
也

卷之三

卷之三

かのものあ風の開きれま  
あきぬのあく  
あともきのあへゆ  
は  
え  
し  
れ

蒙古文書

かとわのまゆは  
かとわめ

寒

卷之三

あらわしのまゝあじやああひるのあわ  
はうとく

年譜

あらまゆもひのうひのふかくもくのうひ  
あらまゆもひのうひのふかくもくのうひ

卷之三

ましの身  
金  
さはに  
か

2

方  
食  
奇  
之  
憤良  
也

۱۷

重慶府白雲食  
あぢらひうた  
た

蒙古語  
十  
厚

陳氏

厚  
寒

寒

四月

物のとて食たるもあらねども食ひにあらず

六百銀

本年四月

神事有りて故よきうつす事も一とぞの事

久安百貫

前事有りてある

ありはせりとあるやうにすれどもいつわざれ

之毎二年六月足情なまう食事

酒三升ま行

物といひりてものとて食ひにあらず

之毎二年八月足情なまう食事

足神御ト

ちよとまで食へうむまくゆきの事

之有事の食食

は高松移

ある事よりの食とて神のうちとて

寛永三年六月足情なまう食事

足神御ト

ゆすじの食とて神のうちとて

足神御ト

あすののすのとて神のうちとて

網代  
四  
三行方上

とて神のうちとて

749

網代人丸浪

浪

望氣

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

月の音のあらわし  
内裏の肩身  
鶴鳴の月

卷之三

寛也之子今門裏奇名酒代

可公譜

あはの道に  
ひまかくと  
ゆきを

家有傷寒之院，不可用也。此雖有病

皮有

三日正午

卷之三

新六三

卷之三

荀子

あまくさにうるいのゆゑ

文治九年立社日首

卷之三

蒙古文

卷之二



はのきのくもとくわやまくらの月と  
はるかに見よ處す日庚申辰

西漢書

網代

卷之三

卷之三

西王母

卷之五

妙思

愁  
多  
寒  
長

千葉百首

早  
日

近井つひあくのうしきねもんもやうとくの外ほとなくい

遠條四軍門裏す合三イ 況二度行被石

ちくわうきうちのよどみをもあこすにじりむホトクイ

えをす一中

或る内祝アリ

猿丸まくら よしの里アシカ けめうらのよしようもうくアリ

西爾治至百首ウキ

ほ京極移改

おさゆりせり田ハラ のよよかきれどもさすきのアリ

夫木和歌抄卷第十六終

